
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 96

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1901. 人生の最後の瞬間
- 1902. メロディー・対位法・ハーモニー・ソルフェージュ
- 1903. 金曜日の夢
- 1904. アイルランドの作曲家ターロック・オキャロラン:吟遊詩人のように
- 1905. 出発と帰還:ターロック・オキャロランの生き様より
- 1906. ユトレヒト行きの列車の中で
- 1907. 存在への問い
- 1908. 将来に受け持つコース
- 1909. 一時帰国に向けて
- 1910. 日本と欧州諸国を旅する夢
- 1911. 滞在許可証の更新
- 1912. アーノルド・ショーンバーグの書籍
- 1913. 曲に潜む意味と思想を求めて
- 1914. 冬季休暇中になすべきこと
- 1915. 夜明けの祝福
- 1916. 来年からの探究活動
- 1917. 日本への一時帰国に向けて
- 1918. 日本へ旅立つ早朝
- 1919. 偶然の再会
- 1920. 日本への到着と共に

1901. 人生の最後の瞬間

今朝は五時半近くに起床し、六時前から一日の活動を始めた。書斎の窓の外から景色を眺めてみると、連日降り続いていた雪が、昨日の雨によって全て溶けていた。一面が雪化粧の世界だったところから、再びこれまでの日常世界に戻った感覚がある。どうやら今日も雨が降るらしいが、明日は晴れの予報が出ている。

少し先の天気予報まで確認してみると、晴れの日が続くことがわかり、少しばかり安堵の気持ちになる。というのも、ここ数ヶ月間、雨の日がやたらと多く、晴れの日を拝めることは稀だったからだ。こちらで言うところの梅雨の時期を乗り越え、現在も寒いことには変わりはないが、少しばかり晴れの日が増えることを嬉しく思う。ちょうど日本に一時帰国する時も天気は雨ではない。

そのようなことを書き留めていると、ポツポツと雨が降り始めた。闇の世界を背景にした窓にぶつかる雨滴を眺めながら、先ほどの夢について思い返していた。豆粒のような人間の赤ちゃんが同じぐらいの大きさの犬となり、それが今度はサバになる夢だ。そして、そのサバは干しサバから焼きサバになり、サバの煮付けへと変化し、そこから犬の魂へと変容していく過程を描いた夢だった。一見すると解釈の難しい夢だが、それは生命の変容過程と魂の転生過程を描いているように思える。

昨日、大学のキャンパスに行くために、小さな家々が立ち並ぶ近所の石畳の道の上を歩いている最中、「自分は人生の最後の瞬間に文章を書いているのか、それとも作曲をしているのか？」という問いが立った。私はキャンパスに向かって歩きながら、その問いについて真剣に考えていた。「私は人生の最後の瞬間に、文章を書いているのだろうか？それとも作曲をしているのだろうか？」という二択の問いであり、人生の最後の瞬間に行くことは他にないようだった。

以前の私は、自分の生命が最後の瞬間に向かうまでの全ての過程を文章で書き残しておきたいという強い思いがあった。しかし昨日の私の回答は、文章ではなく、人生の最後の瞬間には、作曲を通じて生命の終焉までの全過程を表現したい、というものだった。人生を終えようとする際の、言葉にならない世界に移行していく過程の中で起こる、言語を超越した内面現象を音楽として記録しておきたいという抑えがたい思いがあるようだった。

私は石畳の道を歩きながら、自分が取るであろう行動に納得していた。それは賢明な行為に思えたとし、それは自分の人生を生きることを象徴していると納得した。人生を終える最後の瞬間に、その人間の生き様が一粒の確かな粒子として立ち現れ、それが優しい炎に包まれて静かに燃えていく心象イメージが私の内側に起こった。気がつくと、私は大学のキャンパスの前にいた。2017/12/14(木) 06:33

No.546: Go Back to Myself

I'll leave my house at 9 o'clock to go to Amsterdam Airport. My inner world is quite calm today, though I'll go back to my home country. It implies that Japan and I are being integrated at last.

Japan does not exist outside of me. It does inside myself. Rather, I can say that Japan and I are one without borderline. The notion that I am Japan—not Japanese—is a revelatory finding.

Why haven't I noticed it thus far? I'll go back to Japan three hours later, which means that I'll go back to myself. 06:10, Wednesday, 12/20/2017

1902. メロディー・対位法・ハーモニー・ソルフェージュ

今日の早朝は大粒の雪が空から舞い落ちていたが、一日の大半を通じて晴れ間が広がっていた。早朝の雪が嘘であるかのように、昼間から午後にかけて晴天となっていた。そのような天候の移り変わりを書斎の窓から眺めながら、私は今日も一日中、学術研究と作曲実践だけに時間を充てていた。確かに今日は午前中に、二時間半ほど日本企業の方と協働プロジェクトに関する打ち合わせをしていたが、それ以外の時間は全て学術研究と作曲のことで頭がいっぱいであった。

来週から冬季休暇に入るため、この期間は学術研究から一旦離れ、作曲実践に多くの時間を充てたいと思う。メロディーの創出、対位法、ハーモニーの技術に関する理解と技術を高めることに集中する。メロディーの創出に関しては、引き続き“Melody writing and analysis (1960)”を繰り返し読み込み、対位法に関しては、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンも活用していた古典中の古典である“*The study of counterpoint (1971)*”を読み、ハーモニーに関しては、まずはチャイコフスキーが執筆した“*Guide to the practical study of harmony (2005)*”を読み進めていく。

メロディーと対位法に関しては、上記で挙げた書籍をまずは何度も繰り返すことに何ら躊躇はないのだが、ハーモニーに関しては、チャイコフスキーの書籍から始めるのがいいのか、ショーンバーグの“Structural functions of harmony (1969)”から始めるのがいいのか迷っていた。チャイコフスキーの書籍の方が分量は少ないのだが、解説の文章が多い。どちらの書籍もハーモニーに関する具体例として楽譜が豊富に掲載されている点がとても良心的である。ただし、チャイコフスキーの書籍に関しては、実際の作曲家の楽譜を例にとることはほとんどなく、ハーモニーの概念と理論に対応するシンプルな具体例が豊富にある。

一方、ショーンバーグの書籍は、文章による解説はそれほど多くなく、実際の作曲家が残した楽譜の抜粋を用いた具体例が非常に豊富である。どちらの書籍から手をつけていいのか迷った挙句、日本に一時帰国する際の荷物の重さを少しでも軽減させるために、よりコンパクトなチャイコフスキーの書籍から手をつけることにした。明日中に解説文を含め、全体を簡単に一読し終える予定である。そこからは、上記の三冊を読み進める際は、逐一作曲ソフト上に具体例を再現し、実際に自分の耳で音を確認しながらメロディー、対位法、ハーモニーに関する理解を深めていく。

今日の午後に、音大の作曲科のコースのカリキュラムを確認したところ、自分がこれから学ぼうとしていることは大抵カリキュラムの中にあっただけだが、一つだけ私が見落としていたのは「ソルフェージュ」というものであり、これは読譜能力に関するものだということを知った。楽譜を読んでそれを音にイメージする能力はぜひとも開発していく必要があると思っていたため、今後少しずつソルフェージュの訓練を行いたいと思う。ソルフェージュに関する何か良い書籍はないか、近日中に調べておきたい。

作曲技術を高めるために何を学ぶ必要があるのかがようやくだいぶ見えてきたような気がする。毎日文章で日記を執筆しているように、自由に音楽言語で日記を書いていくことの実現には程遠いが、毎日少しずつ前に進んでいこうと思う。2017/12/14(木) 20:27

No.547: Application Progress

As I planned, I finished writing the draft of the application for a visiting fellow position next year. Since it is a rough draft, I need to elaborate it later.

I'm almost arriving at Amsterdam Airport. At the airport lounge, I'll complete another document for the application. Fortunately, I have enough time until my flight. 11:39, Wednesday, 12/20/2017

1903. 金曜日の夢

今朝は五時半過ぎに起床し、六時から一日の活動を開始させた。昨夜の夢も示唆に富んだものであり、夢の中、そして夢から覚めた瞬間の半覚醒意識の中で様々なことを考えていた。特に、「考えることについて考える」という類の終わりのない主題と向き合っていたように思う。

夢の中の自分の発言で興味深かったのは、自分の主張の中に潜む概念が新たな概念を呼び、概念が無限に拡張・膨張していく点を指摘していたことだ。その発言の文脈を忘れてしまったが、確か夢の中に現れた誰かが「自分の主張には拡張性がなく、深度もない」と述べたことを受けて、私は「自分の主張は膨張する一方であり、細部に入ると際限もなく深くへ沈み込んでいく」と述べた。さらに続けて、「それは神経症的な、あるいは病的な形で進んで行く」と私は述べた。夢の中で私は実例を挙げていた。その実例は、一つの主張に含まれる概念が縦横に広がっていき、際限なく拡張されていくことを確かに示すものだった。その様子を私は「病的」と表現し、その言葉を聞いた時点で一度目を覚ました。

時刻は早朝の三時過ぎだった。そこから再び就寝すると、次に見た夢の中で私は、ある砂浜にほど近い小道を歩いていた。そこでの景色は見覚えがあり、それは幼少期に過ごした実家近辺の風景と全く同じだった。松林のある砂浜の横に、車が一台しか通れない一方通行の道があり、その道を私は歩いていた。

道を歩いていると、本来であれば保育園があるはずの場所に、別の施設が建っていた。その施設の役割についてはよく分からないが、施設の駐車場の入り口で門番を務めるような人物が一人、パイプ椅子に腰掛けていた。その人物は椅子に腰掛け、施設の方をじっと見ている。その人物の方に近づいていくと、彼はその施設をモチーフに油絵を描いていることに気づいた。

その絵はとても重厚感があり、建物とそれを取り巻く背景の肉感を見事に表現していた。私はその絵に惹かれるものを感じ、その人物から数メートル離れたところにある小さな空き地の地べたに腰

掛け、その人物が絵を描く様子を後ろからじっと眺めていた。眺めれば眺めるほどに深い味わいのある絵がどんどん出来上がっていった。油絵だからだろうか、やはり色が醸し出す肉感が素晴らしかった。

その油絵に引き込まれてしばらくすると、私の視線の左の方から、小さな鳥の鳴き声が聞こえてきた。鳥の鳴き声に意識が向かうと、どうもこれまで一度も聞いたことのない変な鳴き声であった。そこでその鳥の方を見ると、小さなコウモリが羽をばたつかせて中空に浮かんでいた。私がコウモリの方に視線をやると、そのコウモリは海の方に向かって飛んで行った。コウモリの後ろ姿を眺めていると、夢の場面が突如変わった。

時刻は七時をそろそろ迎える。辺りは全くもって闇の世界であるが、通りを行き来する車が少しずつ増えてきた。また、道を自転車で走り抜けていく人の姿もちらほら見え始めた。今日は金曜日であり、今週にやるべきことを全て終わらせているため、今日はほぼ全ての時間を作曲理論の学習に充てたいと思う。2017/12/15(金)06:46

No.548: Airport Lounge

Once I arrive at the airport lounge, I'll eat lunch there. Then, I'll resume my work to complete the application for a visiting fellow position next year. Because I have approximately three hours until my flight, I hope to finish writing the application documents. If I complete it before my flight, I can spend the rest of my time to music composition. 11:44, Wednesday, 12/20/2017

1904. アイルランドの作曲家ターロック・オキャロラン:吟遊詩人のように

今日は晴れの予報だったのだが、薄い雲が空一面を覆っており、太陽の光りは地上に届かない。今日は早朝からずっと作曲理論の学習を進めていた。午前中は全てメロディーの創出に関する理論に時間を充てた。午後からは、対位法のテキストの再読を始める。

これまでMIDIキーボードを使って入力を行っていたが、調ごとに異なる鍵盤の位置を覚えていないため、様々な調の曲の抜粋を作曲ソフト上で再現しようとするたびに、音程の高さを手動で調整しないとイケないことが手間であった。一旦MIDIキーボードでの入力をやめて、PCのキーボード入力

に変えてみると、この問題に時間を取られることがなくなった。MIDIキーボードを用いることなく、PCで効率的に入力ができるようになると、PCさえあれば世界のどこにしようとも作曲できるということを確認し、少々嬉しくなった。

私は交響曲や協奏曲などは一切作らず、今のところはピアノ曲しか作らないと決めているため、もしかすると大掛かりな装置は今後も必要ないのではないかと思う。PCさえあれば、どこでも曲が作れるというのは私の理想である。

この世界で生きることを通じて自分の内側に起こる瞬間瞬間の現象をつぶさに曲にしていきたい。また、いつか自分の過去の日記の一つ一つに対して曲を作りたいという思いが一昨日に湧き上がっていた。過去の日記から喚起される内面現象を音として形にしていくのである。そのようなことを考えていると、日記から曲を生み出すのみならず、私はいつか父が作った詩や短歌をもとに曲を作ってみたいと思うようになった。

自分にとって重要なことだけを曲にしていく。他者と共にこの世界で生きる自分の内面世界に湧き上がる、自分を捉えて離さない現象だけを曲にする。それ以外のことは曲にしない。そのような思いを新たにした。

午前中の作曲理論の学習が落ち着いたところで、ふとEメールを確認すると、母から一通のメールが届いていた。母はそのメールの中で、アイルランドの作曲家ターロック・オキャロランを紹介してくれた。今から300年以上も前に生まれたこのアイルランド人作曲家を私は知らなかった。オキャロランについて調べてみると、18歳の時に天然痘のために失明し、それでもオキャロランはアイルランドの各地を旅しながら、ハーブ演奏と作曲を行い続けるという人生を歩んでいたことがわかった。

その中でも特に、「アイルランド最後の吟遊詩人」という言葉が強く私に響いた。ここ最近私は毎日のように、この世界を旅しながら、日々を文章と音楽で綴っていくような生活を送ることができたらどれだけ素晴らしいだろうか、ということを考えている。それはまさに、吟遊詩人のような生き方だ。吟遊詩人がこの世界を旅しながら生きることの素晴らしさを謳うように、私もこの世界を旅しながら、生の素晴らしさを絶えず日記と作曲を通じて表現し続けたい。いつかそのような生活を本当に送ってみたいと思う。その日は必ず来るだろう。2017/12/15(金)10:52

No.549: The Sky above Amsterdam

Now, I'm in the sky above Amsterdam. I encountered snow-like clouds that are the paragon of beauty. The sun set is shedding light on the clouds, which are shimmering in a beautiful way. I can almost hear Ravel or Faure's music from the harmony between the clouds and the sun set.

Who doesn't appreciate such wonderful nature of which we are often unaware? We must not forget that nature is radiating at every moment. 17:51, Wednesday, 12/20/2017

1905. 出発と帰還:ターロック・オキャロランの生き様より

人は出発し、人は還るのだ。そのようなことを改めて強く思う出来事があった。

午前中に開いた母からのメールの中に、アイルランドの作曲家ターロック・オキャロランについての言及があったことを先ほど書き留めた。そこからさらにオキャロランについて調べてみると、彼は家庭の事情から実家を離れ、マクダーモット・ロー家に雇用され、その家の支援を受けながらある時期まで生活をしていたようだ。

18歳の時に失明をし、そこからハーブ演奏の修練を本格的に始めたオキャロランは21歳の時に、マクダーモット・ロー夫人の援助を受け、アイルランド中を旅しながらハーブ演奏と作曲をすることを決意した。その後オキャロランは、約50年にわたって、各土地のパトロンのために曲を作り歩いた。私が最も感銘を受けたのは、およそ50年経って、死期が迫っていることを悟ったオキャロランは、世話になったマクダーモット・ロー家に戻ったことである。そこでオキャロランは、当時の主人であったマクダーモット・ロー夫人と共に数週間を過ごし、最期の力を振り絞って『音楽への別れ (Farewell to music)』という曲を作曲した。

音楽から始まり、音楽で終わる人生。出発から始まり、帰還で終わる人生。

私は、オキャロランの生き様に多大な感銘を受けていた。人生は絶えまない出発の連続だが、真の出発に伴う過酷さと困難さを知っているだろうか。そして、旅を続けていくことの過酷さと困難さを知っているだろうか。それ以上に、旅から帰還することの過酷さと困難さを知っているだろうか。しかし、

オキャロランの帰還は、きっと幸福さで満たされた平穏なものであったに違いない。今書齋の中で鳴り響く、オキャロランが最後に残した曲、『音楽への別れ』がそれを静かに語っている。

人生の中で私たちは出発し、帰還する。「帰還」という言葉に含まれるものを思うとき、激しい感動の流れが私を襲った。2017/12/15(金)11:15

No.550: From Frankfurt to Narita

Fortunately, I finished today's work on a train and at the airport. I'm in a lounge at Frankfurt Airport now. I'll take a 10 hour flight from now. During the flight, I can spend all the time to music composition, which gives me tremendous joy. Probably, I will focus on creating music rather than reading texts. Alternated states of consciousness evoked by flight would encourage me to create slightly different music than usual. 17:59, Wednesday, 12/20/2017

1906. ユトレヒト行きの列車の中で

今日は、オランダの主要都市の一つであるユトレヒトを訪れた。フローニンゲンからユトレヒトまでは電車で二時間以上かかるが、ユトレヒトまでの車内の中では、チャイコフスキーが執筆したハーモニーに関する書籍を読んでいた。この書籍は約140ページほどであり、非常に薄い書籍なのだが、字が細かく、さらには具体例が豊富であるため、非常に読み応えがある。初読の際にはまずは解説文だけを読んでいたが、作曲理論の書籍に関して言えるのは、解説文だけを読んでもほとんど意味がないということだ。作曲に関しては、兎にも角にも自分で曲を作ってみる必要があり、こうしたテキストを用いて学習を進める際には、作曲ソフト上で具体例を再現する必要が必ずある。その重要性を思うたびに、それは将棋やチェスにおいて、実際に盤面に駒を置きながら自分の手を動かすことの大切さと似ていると思う。

列車に揺られながら、チャイコフスキーが提示している具体例を眺め、それを頭の中であれこれと考えていると、本当に詰め将棋を解いているような感覚になる。詰め将棋に慣れてくると頭の中でそれができるようになってくるが、それでも実際に手を動かしながら考えることの効用は大きい。それと同じことが、具体例を用いて作曲理論を学習する際にも当てはまる。それよりもむしろ、作曲にお

いては実際に自分の耳でその音を聴いてみるのが何よりも大切であるため、なおさら作曲ソフト上で具体例を再現する重要性が増すように思う。

私には、楽譜を眺め、その瞬間に音を頭の中で鳴らす能力がまだ一切ない。これは今後必ず開発していかなければならない能力の一つであるが、今はその能力が一切ないことを考えると、なおさら手を動かしながら、実際に耳で音を確認しながら作曲理論を学んでいく必要がある。

最近自分でも気づき始めたが、私は思考空間の中で記号に触れること、そして記号を操作することを極度に好む傾向にあるため、抽象的な記号の操作の中に身体を介した音を介入させたい。作曲理論の学習においては、それがとりわけ重要になるだろう。

そのようなことを考えながら、チャイコフスキーの書籍を読み進めていると、作曲理論に対する理解度と作曲技術の発達に関する研究のアイデアがいくつか湧き上がってきたため、書籍の内容とは一切関係ないのだが、そのアイデアを余白に書き込んだ。研究データの入手方法と入手先に始まり、用いる研究手法などを思いついたままに書き留めた。

列車に乗っている時というのは不思議であり、何気なく景色を眺めていたり、あるいは持参した書籍をリラックスした気分で読んでいると、研究や将来の行動に関して思わぬアイデアが湧いてくることがある。今日もまさにそうだった。私は湧き上がってくる研究アイデアを無我夢中で書き留め、その研究をすでに行っているかのような空想を広げていると、気分が高揚し始め、気がつけばユトレヒトのすぐそばまで来ていた。

いつか本当に、今日この瞬間に書き留めたことを研究しているかもしれない。その日が来ることを静かに、そして強く望んでいる。2017/12/16(土) 22:05

No.551: Japanese Atmosphere

Finally, I flew into the sky to Narita. Interestingly enough, once I took a seat on JAL, I felt as if I were already in Japan. This was probably because the mental territory of Japan expanded to the flight even though the airplane was in Germany. Although my mind is still dominated by English, I

don't have to worry about it because my soul already started to resonate with the saturated Japanese atmosphere here on the airplane. 20:09, Wednesday, 12/20/2017

1907. 存在への問い

昨日はユトレヒトに行くために五時に起床していたためか、今朝の起床も四時半と非常に早かった。そこから三時間ほど仕事をし、現在少しばかり仕事が落ち着いたので日記を書き留めている。

昨日のユトレヒトではまたしても不思議な意識状態に陥っていた。欧州での生活を始めて以降、自分の意識が日常意識から非日常意識に移行することが多くなり、もはや非日常意識と日常意識の区別がそれほど大きくないような状態になっている。

ユトレヒト中央駅に到着した時、そこはフローニンゲンの駅よりも大きく、より近代的な形で整備されているように思えた。ユトレヒト中央駅に到着したのは午前九時前だったが、昨日は土曜日だったこともあり、駅にはほとんど人がいなかった。それに対して夕方ユトレヒトからフローニンゲンに戻ろうとした頃には、駅には随分と多くの人がいた。

私は雑踏の中をくぐり抜けるようにして歩きながら、一つ不思議な気づきを得ていた。それは非常にシンプルなものであり、字面上は何の変哲も無いものである。私は道行く人たちの顔を見ながら、「全ての人に一人一人の人生があり、人はそれぞれの人生をありのまま生きている」ということを改めて考えていた。

ユトレヒト中央駅を歩く人たちの中で私のことを知っている人は一人もいないという事実。これはユトレヒト中央駅だけではなく、東京駅で歩いている最中にも起こりうることである。基本的に世界のどこにいたとしても、自分の存在は他の多くの人たちの人生の中には存在していないという事実に対して、とても神妙な気持ちになった。それはもちろん、孤独感と形容されるような感情では決してない。そのような感情ではなく、人はこの世界で基本的に何者でもない形でありのままに生きている、という事実に対するある種の驚きの混じった神妙な気持ちであった。

この世界に生きる多くの他者の認識世界の中に私の存在はなく、私の認識世界の中にこの世界の多くの人々の存在はないという事実。ユトレヒト中央駅を歩き交う人々の群れを眺めていると、お互い

の存在が認知されない中で私たちがこの世界を共有しているという事実が、また一つ大きな驚きを私にもたらした。

日本に一時帰国する日が刻一刻と迫っている。私は日本に戻っても、無数の人々の認識世界の中で存在しない形で生きる存在としてそこにあるのだろう。

一人の人間の存在とは一体何なのであろうか。存在することの意味というよりもむしろ、自分の存在とは一体何であるか、という一見すると不毛に思えるかもしれない問いと私は向き合う必要があるように思える。いや、この問いは欧州での生活の中で日々突き付けられているものであり、それは日本に一時帰国した際ですらも突き付けられるものだろう。もしかすると、この問いは日本に戻った時の方がより激しく自分を襲うかもしれない。2017/12/17(日)07:58

No.552: “Modulation (2007)” written by Max Reger

I finished reading “Modulation (2007)” written by Max Reger. This book is quite concise but dense in a certain sense. Reger provides 100 examples of modulation. Although I expected more detail explanations, it seems that the intention of Roger does not lie in offering verbose explanations but lies in providing succinct explanations with sequences of chords. I’ll decipher ample symbols that look a little bit esoteric to me to grasp the underlying theories of modulation. 20:17, Wednesday, 12/20/2017

1908. 将来に受け持つコース

今週は晴れ間が多く、来週もこのような日が続くようだ。フローニンゲンの冬はこれから始まると言っても過言ではないが、雨季の時代を終えたことはとても喜ばしい。

晴れの日の冬の欧州は、実に厳粛かつ壮麗な雰囲気放っているように思えることがあるが、雨の日が続くと、鬱蒼とした様子だけが開示されるように思えてしまう。この二ヶ月間ほどの、雨が多く降る時期を終え、これからはようやく晴れ間を取り戻した欧州の空を眺めることができる。明日はちょうど、オランダでの居住許可証の延長のため、フローニンゲンから列車で一時間ほどの距離にある街、ズヴォレの移民局に行く必要がある。幸いにも明日は晴れであり、さらには一時帰国をする水曜日

も晴れの予報が出ている。やはり天気が良いことに越したことはなく、晴れであることは私の気持ちを高揚させてくれることに疑いはない。

昨日、ユトレヒトに行くまでの列車の中で、窓の外に広がる田園風景を眺めながら色々なことを考えていた。その一つは、私が仮に今後大学機関で講師や教授として勤務するようになった時、そこでどのようなコースを教えるかというものだった。今の私は、発達心理学や成人発達理論を教えるような意思はほとんど無い。その代わりに、発達研究や教育研究に関する研究手法のコースを担当したいという思いがある。より具体的には、発達研究や教育研究を行う際に、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクス的手法をどのように活用すればいいのかに関する、理論的かつ実践的なコースを担当してみたいという思いが湧き上がってきた。

そこで私は早速、仮に一つのセメスターを通じてこのコースを担当するのであればどのようなカリキュラムが望ましいかを検討していた。およそ16週間にわたるクラスを想定し、16回分のクラスの目次を作成してみた。初回はダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの概略に関する話をし、第二回から第三回にかけて「状態空間グリッド」と呼ばれる手法の理論的解説と実習を行う。その後も、「再帰定量化解析」「交差再帰定量化解析」「トレンド除去変動解析」「標準化分散解析」などを各二回ずつのクラスを用いて紹介をしていく。その他にも扱いたい手法があり、さらにはダイナミックシステム理論の重要な概念を紹介するクラスも設けておきたいという考えがあり、それらを含めると16回ほどのクラスになりそうだった。

ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクス的手法を発達研究や教育研究に適用することを目的にしたコースは世界的に見ても例がなく、一つのクォーターであったが、そうしたコースがあるのはフローニンゲン大学の発達科学科ぐらいだった。そうしたことを背景にし、これまで自分が学んだこと、そして今でもそれらの手法に関する関心を強く持っていることから、いつか上記のようなコースを世界のどこかの大学で教える機会に恵まれたら幸いである。

今日の午前中は、引き続き作曲実践に打ち込む。午後からは、日本に持ち帰るための書籍の選別を行いたい。水曜日からの一時帰国に際して、実家からかなりの和書を欧州に持って帰る予定であり、仮に来年米国に生活拠点を移すことになれば、その時に輸送する書籍をできるだけ減らした

いという思いから、今後の研究で必要になりそうにない書籍を一旦日本に持ち帰ることにする。気づかない間に一時帰国の日がもう目前となった。2017/12/17(日)09:44

No.553: Japanese In-Flight Meals

I ate Japanese in-flight meals, which can be called “soul foods” for me, though it may sound exaggerated. Yet, seriously, I realized again that Japanese foods were my soul foods. They regained my “Japaneseness.”

I bursted into laugh when I couldn't understand several kanjis—Chinese letters—on the menu. You don't have to worry about the difficulty in reading kanjis if you are not native Japanese speakers. 22:16, Wednesday, 12/20/2017

1909. 一時帰国に向けて

ユトレヒトから戻ってきての日曜日もあるという間に時間が過ぎていった。このところ休日中は、全ての時間を作曲実践か自分の関心の赴くままに進める読書に充てている。今日もそのような一日だった。空は晴れ渡り、常に心が爽快な感じに包まれている日曜日だった。

一日の大部分を作曲実践と読書に充てながらも、今日は一時帰国に向けた準備をしていた。準備と言っても、日本に持ち帰る書籍の選定を行っていたぐらいである。この一年間の間に注文し、実家に送っていた全集の大部分を欧州に持って帰ろうと思っているため、とりあえずオランダの今の家で必要にない書籍は一旦日本に持ち帰ることにした。そうでもしなければ、日々の研究で増えていく一方の専門書や論文により、今後の引っ越しが大変になってしまう。

結局この一年半において、随分と多くの書籍をこちらで購入し、大量の論文を印刷していた。そうしたこともあり、文献の量はこちらに来た当初に比べて増えてしまっている。とはいえ、今手元にある文献はこの先何年も参照できるようなものばかりであるが。

今回日本から持ち帰る和書は、今後の私の生活の大きな糧になるだろう。とりわけ、それが私の精神にもたらす意味の大きさは計り知れないのではないかと思う。全集のうちの何冊かは小説であり、できれば実家に滞在している間にそれらの小説を読んでおきたい。小説は年に何度も読み返せな

いであろうから、実家で読み終えることができれば、実家に置いておくことができる。読み返したくなったら、今後実家に帰ってくるたびにそれを読めばいいだろう。

書籍の選定が終わったところで、年末の掃除を兼ねて、自宅を綺麗にしておいた。掃除をしたおかげもあり、年明け以降にこちらに戻ってきた時に、気持ちの良い形で戻ってくるができるだろう。これでとりあえず一時帰国に向けての準備はほとんど完了したと言える。出発の前日に衣類を詰めたらそれで準備は完了だ。

昨年も全く同じ時期に日本に帰国し、その当時のことを思い返してみると、日本に一時帰国するたびに、自分の中の新たな感覚が開かれるような体験をすることに気づく。

今年の体験の中でも印象に残っているのは、隅田川を架ける橋を渡ったときの啓示的体験だ。当時の日記を読み返すことはしないが、今でもあの時の記憶が鮮明に蘇ってくるかのようである。

昨年は、すみだ北斎美術館を閉館日に訪れてしまったため、中に入ることができなかった。今年は開館日をすでに確認している。その日は、およそ四年ぶりに母方の叔父と会い、一緒に美術館を巡り、夕食を共にする。今から日本での滞在が楽しみである。2017/12/17(日)20:39

No.554: Eager Mind

Once I arrived at Japan, interestingly enough, my mind has seemed to reject absorbing English. Instead, it has been esurient of Japanese. The evidence is that I have continuously read Japanese books since I came back to Japan. I'm currently staying at my parents' house, and I'll read as many Japanese books as possible while staying. 05:25, Monday, 12/25/2017

1910. 日本と欧州諸国を旅する夢

今朝は不思議な夢の終わりと共に目覚めた。起床した瞬間に時刻を確認してみると、早朝の五時前だった。ここ数日間は五時前に起床し、そこから一日の活動を始めている。朝早くに起きてその日の活動に取り組むことは、私にとって最も望ましい生活のあり方ようだ。早寝早起きというのは自分の心身に最も合致した生活実践であり、それによって日々の充実感がより深くなっているような

気がする。そして、そうした充実感が日々に幸福感をもたらす。そのような流れがずっと続いている。

昨夜は夢の中で、日本と欧州の土地をつなぐような不思議な世界空間の中に私はいた。どうやら私は小田原のホテルに宿泊し、そこを起点に日本や欧州各地を旅しているようだった。夢の中の世界では、日本と欧州が陸続きになっており、幾つかの欧州諸国と日本は隣り合わせになっていた。

私は小田原のホテルでハングライダーのような空を飛べる乗り物を借りた。それに乗って、小田原からまずはノルウェーに向かった。ノルウェーでの滞在地は、実際の世界で私が今年の夏に訪れたベルゲンであった。ベルゲンという風光明媚な港町で、私は散策を楽しんでいた。

ちょうど私の友人がベルゲン大学のビジネススクールに留学することになっており、どうやら友人のために、このベルゲンの街を案内する計画を私は立てていたようだった。ベルゲン大学のある場所は、ベルゲンの港町を一望できる小高い丘の上に建っている。実際に見たのと同じような、ノルウェーの港町を体現するかのような海と山からなる典雅な情景がそこに広がっていた。

私は小高い丘の上からその景色をしばらく眺めていた。ノルウェーの自然の中に吸い込まれるかのように、そして、この街で日々人々が粛々と生活を営むその空間の中に吸い込まれていくかのようにであった。

友人を案内するはずの予定だったが、私は空に舞い上がりたい気持ちになっていた。私はその気持ちを抑えることができず、再びハングライダーのような乗り物に乗って、小高い丘から空に飛び立った。ベルゲンの街の上空を飛び、港を眼下に眺めながら、次の目的地に向かった。

次の目的地は、ベルギーの山間の街だった。この街の名前はわからない。だが、そこは田舎というよりもむしろ、都会風の様子を持っており、それでいながら自然と調和をしているような街だった。

山を切り開いた道路に私は降り立ち、そこからは歩くことにした。大きな四車線の道路には路面電車が走っており、道の両側には心を落ち着かせるような静かな森が広がっていた。ちょうど私が山から街に向かって道路を下っている時、一台の路面電車とすれ違った。その路面電車には人がま

ばらに乗車しており、電車の最後尾に座っている男性と目があつた。少しばかり恰幅の良い、中年のベルギー人男性だった。

その男性と目があつた後、私は自分の視線を、向かって右側の車線の方に向けた。より厳密には、反対車線の向こう側にある森の中に建てられた家々を私は眺めていた。この道路のように、この森も山から街に向かって傾いている。傾斜のある森の中に建っている家々は、どれもみな個性的な色をしていた。中でも私の目に留まったのは、赤色をしたモダンな家だった。その家が放つ色は華美な赤色ではなく、非常に落ち着いたものだった。

その家を眺めながら道を下っていると、その家から音楽が聞こえ始めた。どこかで聞いたことのあるような音楽。それは自分の魂を安らげ、新たな活動に向けて魂に何かを吹き込むような音楽だった。その曲が終わりに差し掛かった時、私は再びハングラライダーを取り出し、それに乗ってまた別の場所に向かった。

次の目的地も欧州のどこかの国だったが、それがどこの国だったかは記憶にない。その国には、小田原のホテルと同系列のホテルがあり、そのホテルでハングラライダーを返却する予定を私は立てているようだった。他国のホテルにそのハングラライダーを預け、それが小田原のホテルに無事に返却されるかどうかは懸念だったが、この旅の充実感がそうした懸念を空の彼方に吹き飛ばしていた。

2017/12/18(月)06:02

No.555: Continue to be Nobody for Good

Authentic scientists, philosophers, and artists must be nobody forever. Once they become somebody with social status, I think they become sham. Although I'll eternally continue scientific work and music composition, I won't become somebody. I hope to continue to be nobody for good. 11:54, Monday, 12/25/2017

1911. 滞在許可証の更新

今日は午前中にズヴォレの移民局に行き、新しい滞在許可証を入手した。これで来年の12月までは欧州に滞在することができる。もし仮に、来年アメリカの大学院で研究を続けるのではなく、オラ

ンダに残ることに決めたのであれば、再度更新手続きが必要になるだろう。欧州に合計二年間滞在するのか、三年滞在するのかは、アメリカの大学院に受け入れられるかどうかによって左右されている。私としては、もちろん来年に環境を変え、再びアメリカで研究生生活を送ることができれば何よりだが、仮にもう一年間ほど欧州に滞在できるのであれば、それはそれで大きな恩恵がある。その場合には、自分の研究と作曲実践に集中し、自分の関心に沿った旺盛な読書と作曲を行う形で日々が過ぎていくだろう。

仮にもう一年ここに留まるのであれば、学内関係でこなすことも一切ないため、毎日自分の選んだ専門書や論文だけを読み、探究の合間合間に作曲実践をするような生活が一年ほど続くことになるだろう。それはそれで全く悪くない。ただし、繰り返しになるが、私は来年の夏に再び環境を変えることが自分にとって最適なのだと感じている。オランダ、とりわけフローニンゲンは生活環境として素晴らしいが、ここに定住するわけにはいかない。

自分の魂は、やはりまだ幾多の遍歴を欲している。その衝動に従って、私は自分の身体をまた別の国に移したいと思う。所属予定のアメリカの大学院にはしばらく落ち着くことができるだろう、という予感がある。今のところ、6年か7年ほどその場所に留まっていられるような気がしている。そこからまた欧州に戻ってきたい。そのようなことを考えながら、私はズヴォレの移民局に向かっていった。

この移民局を訪れたのは、今年の夏であり、今から一年以上も前なのだが、ズヴォレの駅から移民局への道筋を全て覚えており、これが「エピソード記憶」と呼ばれるものなのだった。イメージとして脳に格納された記憶は鮮明であり、忘れようにも忘れることのできない形で残っているのだと改めて思う。移民局に到着すると、朝一番に訪問したおかげもあり、人が少なく、ほんの15分程度で、更新後の許可書を入手することができた。思った以上に時間がかからず、私は再びズヴォレの駅に足早に引き返し、プラットフォームに待っていた、フローニンゲン行きの列車に乗り込んだ。2017/12/18(月)17:11

No.556: Like My Grandfather Led His Life

I just heard from my mother about my paternal grandfather's story about how he led his life. It was a hidden story about my grandfather. His way of living inspired me so deeply. I'll definitely lead my life like he did with dignity. 20:34, Monday, 12/25/2017

1912. アーノルド・ショーンバーグの書籍

フローニンゲンからズヴォレの街まで列車で行くのに、一時間ほどの時間がかかる。行きと帰りの双方において、私は車内でアーノルド・ショーンバーグが執筆した“Structural functions of harmony (1954)”を読んでいた。このテキストはタイトルにあるように、ハーモニーに関する分析とハーモニーの創出方法について学ぶ専門書であり、内容は今の私にはとても高度である。しかし、依然として知識量が欠けている私であっても、所々わかる箇所があるのもまた事実だ。

私自身、ショーンバーグが残した曲についてはあまり関心を持っていないのだが、彼の作曲理論には関心を寄せている。行きと帰りの合計二時間をかけて、ざっと書籍の内容を一読しようと思っており、その通りに、私は車内の中で食い入るように本書を読み進めていた。

本書には、とにかく数多くの具体例が掲載されており、ショーンバーグの解説も親切だ。もちろん、今回の初読時に理解できたことなど微々たるものであったが、本書の内容の次元がどのくらいなのかについておよそ見当がつき、そこに向かって歩いていく道筋のようなものが得られたことは大きい。また、豊富な具体例を眺めながら、今後は実際に作曲ソフト上で一つ一つの具体例を自分の手で再現し、その音を自分の耳で確かめることが何より大切だ。さらには、具体例の再現で留めるのではなく、具体例をアレンジする形で自分の曲を作っていくことは、何より有意義な実践になるだろう。

具体例を読み、ショーンバーグの解説文を読み、それを頭の中で理解することだけでは不十分だ。そこで獲得された知識が実用に足らなければならない。ここで述べる実用とは、言うまでもなく、自分の曲を作るということを意味する。ショーンバーグが本書を通じて提示している具体例の数は、数百にも及ぶため、本書を基にして少なくとも数百の曲を作れなければ本書を読んだ意味がない。あるいは、本書を基に数百の曲を実際に作ってみなければ本書を読んだ意味はない、と言い換えることもできる。とにかく、作曲において重要なのは、学んだ概念や理論をとにかく自分の手を動かしながら実際の曲を作ってみるということである。

ここの二週間は、私は自分の曲を作ってみるのではなく、あえて理論を学ぶことに集中し、具体例を作曲ソフト上で再現することに多くの時間を使っていた。明後日からの冬季休暇においては、ここ数週間集中的に学んだ理論を基に、再び実際の曲作りの方に力を入れたい。理想は毎日新しい

曲を作ることだが、今の私は、まず土台となる基礎的な知識と技術を確立することが先であるため、絶え間なく自分の曲を作るとはまだ先のことになるだろう。おそらく、絶えず手を動かしながら集中的に理論を学ぶことに一・二週間の時間を充て、そこから次の一・二週間は曲を作ることに重点を当て、再び集中的に理論を学ぶというようなサイクルが今後しばらく続くだろう。

もちろん、そのサイクルの中では、理論を学ぶことと自分の曲を作ることの双方を行っていくのだが、どちらの比重を大きくするかが時に応じて変化するようなイメージを持っている。明後日からは、ここ一・二週間で集中的に学んだ理論を基に、再び自分の曲を作ることに重点を当てたい。2017/12/18 (月)17:28

No.557: My Mind and Japanese

My mind has been occupied by Japanese since I came back to Japan. The evidence is that I've not read books and academic articles written in English since 5 days ago. In addition, the amount of my English diaries has decreased. The surrounding environment is undoubtedly influencing my mind. 05:53, Wednesday, 12/27/2017

1913. 曲に潜む意味と思想を求めて

ズヴォレからフローニンゲンに戻る列車の中で、私はずっと、アーノルド・ショーンバーグが執筆したハーモニーに関する書籍を読んでいた。本書に掲載されている豊富な具体例を見ながら、これは将棋で言うところの棋譜であり、数学における数式の解法例だと思っていた。

作曲において曲を作るプロセス、将棋において手を打っていくプロセス、数学において数式を解くプロセスにはどれも、「こうなったらこうする」という法則性や方法論が存在している。作曲に潜む法則性と方法論について思うだけで、私の心は無性に晴れ渡り、飛び上がりたいぐらいの高揚感を覚える。現在の私の作曲技術と関連知識は依然として皆無に等しいが、知性・感性・経験を総動員して、法則性や方法論を発揮していく作曲ほど、自分の感情を高鳴らせてくれるものは他にない。

一つの音符から次の音符への移行には意味があるということ。その意味が何なのかを自分なりに探求し、掴んでいきたい。名棋士の一手に固有の意味があり、その人の感性と思想が色濃く表れるよ

うに、名作曲家が残す一つの音符には固有の意味があり、作曲家の感性と思想が反映されているのである。そのようなことを思うと、作曲家の楽譜を眺め、意味を見出す行為そのものが歓喜を引き起こし、その行為に従事することが絵も言わぬ充実感を引き起こす。

ショーンバーグが掲載している数小節の具体例を眺めるだけで、不思議な高揚感と興奮が自分の心身に起こる。一つ一つの音符の配置と移行には奥深い意味が隠されているのだ。そして、その配置と移行を推進させるものが、まさに作曲家の音楽体系であり、音楽思想に他ならない。そうしたものを一つ一つ紐解いていくことが、たまたま楽しいのである。知識の不足から、今はそうしたものを紐解くことはあまりに難解である。しかし幸いなことに、一つ一つの音符の配置と移行の中に、作曲家の音楽体系と思想が滲み出ているという確かな気づきを得られたことが、何よりも幸福なことである。

列車に揺られながら、そうした幸福感は高まる一方であった。ここから私に求められるのは、当然ながら引き続き作曲理論の学習と作曲実践を継続させていくことなのだが、音符の配置と移行に関する無数のパターンを可能な限り全て意識的に取り入れていくことであり、同時に自らの経験の層を豊かにしていくことだ。それは単に作曲家としてというよりも、一人の人間としての経験の層をより豊穡なものにしていくことが必要となる。

音の持つ無数の組み合わせとそれが生み出す無限の表現世界に、私はのめり込んでいるようだ。それは単純に、私が抽象的な記号の組み合わせとその操作を好むという傾向があるのみならず、無数の組み合わせが生み出す美しい音楽は、自己を超えた秩序世界を顕現させる働きがあるように思えるからである。私は純粋に、そうした世界を垣間見たいと望み、そうした世界に自己の存在を預けたいと臨んでいる。

これまで生み出されてきた音の無数な組み合わせを可能な限り学び、それらを実践で活用できる次元にまで身体知にし、その身体知を用いた創作活動に打ち込める日をとても楽しみにしている。その日がやってくることを創造するだけで、自分の存在から幸福感が溢れ出しそうだ。2017/12/18 (月)17:48

No.558: My Spiritual Home

I can see the Inland Sea of Japan from the window in my parents' place. The scenery pacifies and refreshes my soul. I can feel joy from my soul. This is my spiritual home. 07:09, Wednesday, 12/27/2017

1914. 冬季休暇中になすべきこと

気が付けば、今日も夜の九時を迎えていた。今朝も早朝の五時過ぎから活動を開始していたためか、午前中にズヴォレの移民局に行ってきたことが、何か今日の出来事でないかのように感じられる。

ここ数日間ほど、日本語で日記を綴るエネルギーのようなものが減退している自分がいたが、今日は再びいつも通りに言葉が流れ出てくるようになった。いつも日々の取り留めもないことを書き綴っているだけであるが、それが逆に日記を書くことの意義のような気がしている。厳密には、日々の取り留めもないことを書き記すことにより、そこに差異を見出し、日々の瞬間瞬間に生起している現象に自分なりの意味を付与することが可能になる。その積み重ねが日々の充実感につながっていき、日々の生活に絶え間ない幸福感を流し込む。

少なくとも私は、日々の生活の中で起こる、執筆衝動をくすぐる全ての現象を日記として記録していく。それが自分なりの生き方であり、それが自分の人生を生きることである。

今日は午後の三時半から行われる研究グループのミーティングに参加するために、20分前に自宅を出発した。自宅からキャンパスに向かう最中、私の頭の中は、休暇中にこなすべきことと、幾つかの取り留めもない主題についての雑多な考えで渦巻いていた。休暇中にすべきことの一つとして、来年の九月から米国の大学院で研究を続けるための応募書類を完成させておく必要がある。分量としては多くないが、その大学院で行う予定の研究に関する計画書を執筆する必要があり、計画書の中に研究アドバイザーの候補と聴講予定のコースを明記する必要がある。

すでに研究アドバイザーの候補になりそうな教授5~6名に連絡を取り、大半の教授から好意的な返信が返ってきた。また、所属期間中の各セメスターにそれぞれ二つほどのコースを聴講する予定

であり、それについてもすでに何を聴講するか決まっている。何をテーマに研究をするかも決まっているため、このドラフトの執筆は、明後日に日本へ向かう最中に初稿を完成させたい。もう一つ応募書類の中で大切となる推薦状に関しては、昨年研究アドバイザーを務めてくださったサスキア・クネン教授に依頼をしようと思う。この推薦状についてもドラフトを執筆し、その後クネン教授に言葉を付け足してもらうことにする。そのようなことを考えながらキャンパスに到着し、研究グループのミーティングに参加した。

今日のミーティングはいつも以上に早く終了した。おそらく、もう一人のメンバーであるハーメンと私の研究の双方が順調に進んでいるためだろうと思う。とはいえ、研究アドバイザーのツショル教授から、冬季休暇中に進めておくべき研究課題をいくつか列挙してもらった。日本に一時帰国している最中はできるだけ研究から離れ、心身をリラックスさせたいと思っているため、それらの課題についても、日本への行き飛行機の中、もしくは空港のラウンジで済ませたいと思う。いよいよ日本への出発が明後日となった。2017/12/18(月)21:18

No.559: Viktor Frankl and Bertrand Russell

Yesterday, I continued to read various philosophical books, some of which are on my father's book shelf. Viktor Frankl provided me with huge inspiration again. Also, Bertrand Russell gave me tremendous insights. I have to carefully read their books again. I'll not delve into both works, but I want to mention the existential fact that Frankl and Russel reside in me. 08:06, Thursday, 12/28/2017

1915. 夜明けの祝福

今朝も早朝の四時半過ぎに起床し、五時から一日の活動を始めた。先週の土曜日にユトレヒトを訪れた際にこの時間に起きて以降、ここ数日間、四時半あたりに起床するようになった。おそらく日本に一時帰国する明日もこの時間に起きそうだが、日本に戻った後は時差の都合もあり、何かしらの調整が自分の身体に起こるだろう。

昨日、研究グループのミーティングが終わり、キャンパスから自宅に戻っている最中、「人は創りながら生きている」という気づきに改めてぶつかった。もしくは、そうした気づきが降ってきたと言ってい

いだろう。この気づきは、以前からも芽生えていたため、新しいものでは全くないのだが、昨日のそれは自分の身体の奥に染み渡っていくような重さを持っていた。

現在、自宅からキャンパスに向かう最中の運河近辺が工事をしており、道路が着実に日々整備されている。私は何気なく工事現場で働く人たちを眺めた時、「人はこのようにして創りながら生きているのだ」と思ったのである。

全ての人が、その人固有の創作活動に従事しながら毎日を過ごしている。この何気ない気づきは、私を深く内省的にさせた。物であれ、サービスであれ、私たち人間は常に何かしらの創作活動に従事し、それを人々と共有しながら生きている。

創作活動の普遍性と尊さ。そのようなものが一気に私に押し寄せた。

私たちは、創作活動に従事することを通じて自他を育み、この社会に関与していく。創造を通じた発達と関与がそこにある。この気づきこそが、今の私の日々の活動の支えになっているような気がしてならない。それは学術研究の支えとなり、自分自身の創作活動の支えになっている。

創ることを絶えず続け、創ることを絶えず探究する毎日を送ることができるのであれば、その他に望むものは何もない。私の人生において、創造することこそが充実感と幸福感を日々の一瞬一瞬にもたらす。

外は過酷な寒さを呈しているが、書斎の窓を開け、新鮮な空気を入れることにした。すると、真っ暗闇に包まれた世界の中で、小鳥のさえずりが聞こえ始めた。何かを祝福するような、そんな鳴き声がどこからともなく聞こえて来る。

その鳴き声は何を祝福しているのだろうか？おそらく小鳥たちは、今日という新たな日に対して、そして今この瞬間に対して祝福をしているのだと思う。

今日という新たな一日は、そして今日を構成する瞬間瞬間は、充実感と幸福感に満ちている。そうであれば、それを祝福しない人間などいるだろうか。2017/12/19(火)05:29

No.560: Choral Voices

While playing my mother's keyboard, I accidentally noticed that choral voices sounded tremendously beautiful. I experimented putting notes on my keyboard based on the choral mode. Human voices can manifest breathtaking beauty. The desire to compose music for choral voices showed up within me. When I compose such music, I have to be careful with the nature of human voices—e.g., pitches, rhythms. 15:02, Thursday, 12/28/2017

1916. 来年からの探究活動

昨夜、今後の学術探究の進め方に関して少しばかり立ち止まって考えていた。今の私は、自分が何を真に探究したいのかをすでに分かっている。そして、そうした探究対象が少しずつ形を変え、多様な領域に伸びていくことも知っている。

昨夜、来年から所属する予定の米国の大学院で何かしらの講義を聴講する場合、どのような講義を履修したいかを考えていた。客員研究員としての期間は一年であり、二つのセメスター分の時間しかないため、多くの講義を聴講することはできない。講義を聴講するよりもむしろ、自分の研究を進めていくことが客員研究員期間中に優先されるべきことだ。それでも、二つのセメスターのそれぞれに講義を聴講する機会に恵まれるわけであるから、どのような講義を履修したいのかについて考えていた。すると、自分はもはや発達心理学に関する講義を聴講したいとはそれほど思っていないことに気づいた。

私の最大の関心は人間発達、とりわけ成人発達にあるが、成人の発達に関する理解を深めるために発達心理学や成人発達理論をこれ以上学んでもほとんど意味はない、と思うようになっている。成人発達に関する理解を深めるためには、全く別の学問領域の観点とアプローチが必要なのだ、ということを再認識している。おそらく、こうした認識は数年前から芽生えており、だからこそ私は今、オランダのフローニンゲン大学で複雑性科学や実証的教育学という分野を探究しているのだと思う。そうした思いもあり、来年の一年間で仮に各セメスターに二つの講義を聴講するのであれば、どのような内容の講義を聴講するのかを考えていた。一つは統計学科が提供する「時系列データ分析」の講義、二つ目は哲学科が提供する「芸術理解」の講義、三つ目は音楽科が提供する「音楽理論」あるいは「作曲分析」の講義、四つ目は「アクションリサーチ」の講義が候補として挙げられた。

来年から客員研究員として所属する予定の大学は、博士課程の進学先候補としても考えており、仮にその大学の博士課程に進学したら、私はどのようなコースを最初の二年間で履修するのかを考えていた。人間発達と教育に関する博士課程に在籍したとしても、私は、発達心理学や教育学に関する講義を履修する気がそれほどないことに気づいた。それよりもむしろ、哲学科や音楽科の講義を数多くカリキュラムに組み込むことになるだろう。「教育哲学」「マルセル・プールの文学とその思想」「ハイデガーの思想」など、哲学科には幾つもの興味深いコースがある。また、音楽科に関しては、音楽理論や作曲関係のコースが豊富にあり、それらをできるだけ履修していきたい。

そうしたカリキュラムの中で、人間発達と教育を探究し、自らの研究を進めていく。私はやはり、自分の魂が真に望むものしか探究できないのだと思う。

一見すると、いくら自分の研究対象とかけ離れているように思えても、それを探究したいと自らの魂が望んでいれば、迷わずそれを探究しようと思う。おそらく来年から私は、本格的に哲学と音楽の探究に乗り出していくことになるだろう。2017/12/19(火)05:48

No.561: The Peaceful Sea

The peaceful sea is shining today, too. Seeing it makes me peaceful. Isn't it intriguing that the sea that looks peaceful makes me serene? Why or how do humans change their emotions by external stimuli?

Once I think that the sea is peaceful, I may become restful at the same time, or because I'm peaceful, I may perceive the sea to be tranquil. Anyway, the sea in front of my parent's place is exceptional. 09:03, Friday, 12/29/2017

1917. 日本への一時帰国に向けて

無風かつ無音の闇の世界が外に広がっている。辺りは妙にとっても静かだ。先ほど無事に、明日の一時帰国に向けた準備が整った。今後の研究で必要ではないであろう書籍を一旦実家に持ち帰り、実家から数十冊程度の和書の全集を持ち帰るために一つ大きめのスーツケースを持って行く。また、機内持ち込み用の小さいスーツケースを携えて、一年振りに日本に帰る。

今日、午後に大学のキャンパスから自宅に戻ってくる最中、帰ることのできる場所があるということの有り難さをふと実感した。帰ることのできる故郷があるということが、どれだけありがたいことなのか、それは異国の地での生活が長くなればなるほどに実感する。祖国を失い、難民となることの重大性について、これまで私は真剣に考えたことがなかったが、帰ることのできる場所がないということは、どれだけ大きな実存的危機をもたらすだろうか。

そのようなことを考えながら、私は鬱蒼とした天気の中、自宅に向かって歩いていた。もう数ヶ月にわたって、二日連続完全に晴れている日を見ない。一日中晴れているということは極めて稀であり、一日のどこかに必ず小雨が降る。そのような日々がずっと続いている。

明日から数日間だけ滞在する予定の東京の天気は、幸いにも晴れの日が続くようだ。二日連続で晴れの天気を経験するというのは本当に久しぶりであり、それは少なからず私の心身に影響を与えるだろう。

私は基本的に毎年年末に日本に帰国しているが、わずか一年日本で生活をしないだけでも、改めて日本を訪れてみると、目には見えない変化を感じ取ることができる。これは日本における変化と私自身の内側の変化が重なって知覚される二重の変化だと言える。今回の一時帰国の際も、必ず何かしらの変化を感じることになるだろう。

明日はアムステルダムスキポール空港からフランクフルト空港に行き、そこから成田に向かう。スキポール空港では午後の四時の便に乗るため、明日はゆったりとした時間に出発することができる。とはいえ、早めに空港に到着し、ラウンジでこの休暇中にこなすべき仕事を進めておきたいと思う。そのため、朝は九時頃に自宅を出発し、十二時前に空港に到着するようにする。

フローニンゲンからアムステルダムまでは列車で二時間半ほどの時間があるため、来年に所属予定の米国の大学院への応募書類のドラフトを完成させたい。仮に行きの列車の中でそのドラフトが完成すれば、空港のラウンジでは研究計画書の最終ドラフトを完成させたい。それが全て予定通りに終われば、スキポール空港からフランクフルト空港へのフライト、およびフランクフルト空港から成田空港へのフライトの最中は、基本的に全て作曲実践と日記の執筆に時間を充てたいと思う。

明日から日本に一時帰国することがまだ信じられないでいる。こうした感覚は昨年にはなかったものであり、その正体は日本に到着してから明るみになってくるだろう。2017/12/19(火)21:59

No.562: Universal Works

True artists do not create their works for somebody. Instead, they do for nobody. This is the trick of why we are impressed by great works. Only after artists transcend themselves and others, they can create universal works. 06:35, Saturday, 12/30/2017

1918. 日本へ旅立つ早朝

日本へ一時帰国する朝を迎えた。早朝の五時に起床し、いつもと変わらずに、まずは日記を執筆している。

昨夜にも書き留めていたように、これから日本に一時帰国しようとしているにもかかわらず、自分の心には一切の波風が立っておらず、極めて穏やかだ。書斎の外に広がっている世界と同じように、全てが静まり返っている。こうした感情をもたらしているのは、もしかすると、物理的に日本を離れて暮らすことによって、心理的に日本に近づくという逆転現象が起こっているからかもしれない。

確かに、物理的には日本は遠いかもしれない。だが、心理的には絶えずとても近くにある。物理的には欧州と日本は大陸を隔てているが、心理的な大陸は連続的に続いている。こうした連続的な流れが欧州と日本の間にもたらされたことを、私は喜ぶべきだと思う。

ようやくここまで来たのだという思いがやってくる。一方で、日本と私との関係性はこれからも変化し続けるだろう、という思いも去来する。自らの内側の変容に合わせて、日本像が変容し、日本との関係性も変容する。その様子を見ていると、日本は自分の外側にあるのではないことが歴然とわかる。日本は自分の内側にあったのだ。であるからこそ、自分の内面の成熟に合わせて変容していくのである。

さらに一歩進めて考えてみると、日本は自分の内側に存在しているということのみならず、自己の存在は日本に他ならないことがわかってくる。そうだったのだ、日本は自己の存在だったのだ。それゆ

えに、自己の深まりに応じて日本像が変容し、両者の関係性も変容してくのだ。私はなぜ、このシンプルな事柄にこれまで気が付かなかったのだろうか。

本日のフローニンゲンの天気は朝から霧がかかっている。真っ暗な闇の世界に霧がかかっている姿は、どこか幻想的ですからある。街灯の光が霧を静かに照らしている。

あと何回自分は日本の大地に降り立つことができるのだろうか。最近そのようなことをよく考える。それは有限なものであり、すでにそのカウントダウンが始まっている。今回の一時帰国により、またその回数が一回ほど減った。

欧州での生活を始めてから、私は有限なものと同様なものについて無性に考えを巡らせるようになった。いや、考えざるをえないような何かは自分に働きかけているのである。

この世界を眺めていると、世界が数かぎりない有限なもので満たされていることに驚く。そしてさらに驚くのは、自分を含め、人々はその有限性に気づかない形で日々を過ごしているということである。一方で、この世界には永遠なるものも確かに存在しているのだという実感を、私はこの地で掴んだ。だが、永遠を感知し、永遠の中で生きることは極めて難しい。少なくとも、この世界に遍満する有限なものについての認識がなければ、永遠など気づきようがないのである。

自分の内側で沸々と湧き上がってくる創造衝動は、自己の有限性を乗り越え、それを永遠なものに変容させようとする試みなのかもしれない。私は今日もその試みに向かっていく。2017/12/20(水)

05:59

No.563: Dinner with My Family

Yesterday, I enjoyed dinner with my parents, spending much time to discuss various topics. In particular, the topics of the essence of art and the way of living were the most memorable. My father provided me with his view of those topics. Although I'll not articulate them here, I'll not forget forever what my father said to me. I believe I can continue to live my life in an authentic way. 06:40, Saturday, 12/30/2017

1919. 偶然の再会

今、オランダ航空のラウンジでこの日記を書いている。フローニンゲンからアムステルダム空港までは非常に速やかな移動がなされ、空港に行くまでの列車の中で、来年に客員研究員として所属予定のアメリカの大学への応募書類を作成していた。当初の予定通り、二時間半の乗車時間のうちに研究計画書のドラフトを書き上げた。そうした短時間の中で研究計画書のドラフトを書き上げることができた理由は、その新たな研究は今の研究の延長上にあるからだろう。実際に、今年から取り掛かり始めている研究の計画書をもとに、内容を肉付けする形で来年の研究についての計画を練った。

ここ最近突如として、芸術を通じた人間発達、とりわけ音楽教育に関心を持つようになった。音楽教育といっても、その対象は成人であり、特に作曲理論に関する理解力の発達と作曲技術の発達に大きな関心を寄せている。来年に所属予定の大学でもその研究に取り掛かりたいのだが、応募書類を作成している最中に、一見するとこれまでの研究内容と大きな飛躍があるように見られてしまう可能性があるため、なんとか一貫性のあるストーリーを構築することはできないかと考えていた。しかし、それは一筋縄ではいかず、やはり当初の予定通り、来年は今年に引き続いてMOOCの研究に取り掛かる。ただし、研究対象とするMOOCのコースを音楽関係のものにしようと思う。

ちょうどその大学もMOOCを提供しており、偶然にも音楽関係のコースをいくつか提供している。それらのコースから一つを選び、引き続き非線形ダイナミクス的手法を活用した研究を継続させていきたい。

発達現象は非連続的かつ連続的に生じるものであり、私の中では、作曲を対象にした研究はこれまでの研究と非連続的な関係でありながらも、両者は連続的に結びついていると考えている。ただし、その連続性を説明するためには十分な分量の文章が必要であり、今回の研究計画書は字数の都合上、それを行うのは至難の技である。そうした事情もあり、来年の研究は今年に引き続きMOOCを対象にし、再来年に本格的に作曲に関する能力発達の研究に着手する。来年は再び米国に渡り、大学を含め、そこでの環境に慣れるためにも、最初の一年は今年の研究の延長線上でいだろう。もちろん、MOOCに関する研究をしていても大きな充実感があるのだが、再来年にはそれ以上の充実感が得られるかもしれない。そのようなことを考えながら、研究計画書を完成させた。

時刻を見ると、アムステルダム空港に到着する頃になり、パソコンを閉じた。空港に到着し、列車を降りた瞬間に、後ろから「ヨウヘイ！」と呼ぶ声がした。声のする方を振り返ってみると、昨年同じプログラムに所属していた、インドネシア人のタタの姿がそこにあった。まさかここでタタに会うとは思ってもいなかったため、私はとても驚いた。

タタも私と同じように、これから故郷に戻るそうだ。タタとは一ヶ月前にカフェで話をしたのだが、ここでまた会えたことは大きな偶然であり、嬉しい再会であった。私たちはお互いの休暇が幸福に満ちたものであることを祈りながら、その場で別れた。オランダ航空のチェックインカウンターに向かう私の足取りはとても軽やかだった。2017/12/20(水) 13:59

No.564: A Quasi-Poem

The amount of each entry of my English journal has been succinct recently. I may keep the volume of each entry as if it were a poem. This diary should be a quasi-poem to express myself that can be expressed only by the format of poem. I'll continue Japanese journals, poem-like English journals, and music composition. 07:11, Saturday, 12/30/2017

1920. 日本への到着と共に

長時間に及ぶ空の旅が終わり、無事に日本に到着した。現在、私は都内のホテルでこの日記を書いている。フランクフルトでのトランジットを合わせると、フローニンゲンの自宅を出発してから都内のホテルに到着するまでの時間はかなりのものである。

長旅の疲れもあるため、今日はホテルの近くのデパートで夕食を購入し、ホテルの自室でそれを食べ、早めに就寝することにした。旅の疲労もあるため、今夜はあえて詳しく書くことをしないが、日本に向かう最中、私は様々なことを考えさせられていた。自分と日本との関係性、これからの人生、生きることの意味などについて、私の思考が止むことはなかった。日本に到着してからも、言いようのないような感情が自分の内側に渦巻いていた。それはもはや否定的だとか肯定的だとか言えるようなものではない。そのような分類を超えた問題に私は直面しているようだ。

よく分からない。誰かに手紙を書きたい気持ちが自分の中で芽生えている。しかも、自分が知っている誰かに宛てたものではなく、全く名の知らない誰かに向けて手紙を書きたいという思いが募る。

ホテルの最寄駅に到着した時、この大都会の中で、私は自分の存在について沈思黙考せざるをえなかった。見知らぬ無数の人たちが私の目の前を通り過ぎ、彼らは私の世界の中にいないようできて、いるとも言える。同時に、彼らは私の世界の中にいるようできて、いないとも言える。逆に、彼らからしてみれば、私の存在も同様に考えられる。この世界で存在することの意味とは何だろうか。

欧州で生きることだけが過酷なのではなく、日本で生きることも過酷なのだ。この世界で自己が生きるといふこと、そして存在することは本質的に過酷なのだ。

今日はもうこのあたりにして就寝しようと思う。2017/12/21(木)20:57

No.565: A Paragon of "Idea"

I'll propose a small theme to myself in order to elaborate my composition skills. For instance, I'll compose music based on the shining winter sun that I'm seeing right now. Both realism and transcendentalism are essential to my music. The point is to fully manifest an inner phenomenon as a form of music. In other words, my music should be a paragon of Idea. 10:34, Saturday, 12/30/2017